

【 復活讃詞 第1調 】

きゆ うせ え いしゆよ、 イウ デ ヤ の ひ と は か を
 救 世 主 人 墓
 ふ うじ て 、 へ い そ つ なんぢ の い さ ぎ よ き み を
 封 兵 卒 爾 潔 軀
 ま も る と き 、 なんぢ は み っ か め に ふ く か つ
 守 時 爾 三 日 目 復 活
 し て 、 せ か い に い の ち を た ま え り 。
 世 界 生 命 賜
 ゆ え に て ん ぐ ん は なんぢ い の ち を ほ ど こ す の
 故 天 軍 爾 生 命 施
 し ゆ に よ べ り 、 ハ リ ス ト ス よ 、 こ う え い は
 主 呼 光 榮
 なんぢ の ふ く か つ に き し 、 こ お う え い は なんぢ
 爾 復 活 歸 し 光 榮 爾
 の く に に き す 、 ひ と り ひ と を い つ く し む
 國 歸 獨 人 慈
 し ゆ よ 、 こ う え い は なんぢ の お も ん ぱ か り に
 主 光 榮 爾 慮
 き す 。
 歸

【 グリゴリイ・パラマのトロパリ 第8調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 。
 光 榮 父 子 聖 神 歸

せ い き ょ う の と も し び 、 き ょ う か い の か た め
 正 教 燈 教 會 保 固
 お よ び き ょ う し 、 し ゅ う し ら の か ざ り 、 し ん が く
 及 教 師 修 士 等 飾 神 學
 し の う ち の か た れ ぬ ぐ ん し 、 き せ き し ゃ グ リ
 師 中 勝 軍 士 奇 跡 者
 ゴ リ イ 、 テ ッ サ ロ ニ カ の ほ ま れ 、 お ん ち ょ う の で ん
 り ー 、 テ ッ サ ロ ニ カ の ほ ま れ 、 お ん ち ょ う の で ん
 恩 寵 傳
 ど う し ょ 、 わ れ ら の た ま し い の す く わ れ ん こ
 道 師 我 等 靈 救
 と を つ ね に い の り た ま え 。
 常 祈 給

【 グリゴリイ・パラマのコンダック 第8調 】

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 今 何 時 世 世
 し ん げ ん し ゃ グ リ ゴ リ イ よ 、 わ れ ら な ん ぢ え い ち の
 神 言 者 我 等 爾 睿 智
 せ い に せ ら れ し し ん み ょ う な る き か ん 、 し ん が く
 聖 神 妙 機 關 神 學
 の こ う め い な る ラ ッ パ た る も の を ど う し ん に か し ょ
 光 明 角 者 同 心 歌 頌
 う し て い の る 、 し ん ぷ よ 、 げ ん し の ち え の
 祈 神 父 原 始 智 慧

まえにたちえとして、われらのちえをか
前立智慧我等智慧彼
れにむかわしめたまえ、われらがよばんた
向給我等呼爲
めなり、おんちやうのでんどうしよ、よろ
恩寵傳導師慶
こべ。

司祭) (^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、^{せいさん こえ もつ かしょう}セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう}ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ}なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい}願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ と き おい なんぢ せい}を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの}る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ}なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ}以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい}を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ}生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋 ^{けだしわ かみ なんぢ せい}我が神よ、爾は聖なり、^{われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ}我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
に、

アミン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

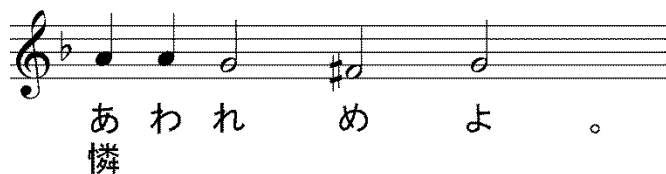
れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇

き 毅 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 聖 常 生 者 我 等



あわれめよ。
憐

司祭) (黙誦: 主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第5調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、斯の世より永遠に至らん、



しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
主 爾 我等 保 我等 護
りて、このよよりえいえんにい
斯 世 永 遠 至
たらん。

誦經) 主よ、我を救い給え、蓋義人は絶えたり、



しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
主 爾 我等 保 我等 護
りて、このよよりえいえんにい
斯 世 永 遠 至
たらん。

誦經) 主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、



【 使徒經 (アポストロス) 304 端 エウレイ書 1 章 10 節～2 章 3 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 主よ、爾初めに地を基けたり、天も爾が手の造工なり。此等は亡びん、然れども爾

は永く存す、此等は皆衣の如く古び、爾衣服の如く之を捲き、此等は易らん、然

れども爾は易らず、爾の年は終らざらんと。神は何の天使に對いて曾て云いしか、

爾我が右に坐して、我が爾の敵を爾の足の凳と爲すに迄れと。彼等は皆奉事する神、

遣されて、救を嗣がんとする者の爲に役事する者に非ずや。是の故に我等聞きし所を

尤慎むべし、恐らくは或は離れ落ちん。蓋若し天使等に藉りて告げられし言は堅

く立ちて、凡の違背と不順とは公正の報を受けしならば、我等此くの如き救を願

みずして、如何ぞ這るを得ん。斯れ始主に因りて傳えられ、彼より聞きし者に因りて我

等の中に堅く立てられ、神に縁りて、其旨に循いて、休徴、奇蹟、種種の異能、及

び聖神の分予を以て證せられたり。

(比較用 口語訳) 「主よ、あなたは初めに、地の基をおすえになった。もろもろの天も、み手のわざである。これらのものは滅びてしまうが、あなたは、いつまでもいますかたである。すべてのものは衣のように古び、それらをあなたは、外套のように巻かれる。これらのものは、衣のように変わるが、あなたは、いつも変ることがなく、あなたのよわいは、尽きることがない」とも言われている。神は、御使たちのだれに対して、「あなたの敵を、あなたの足台とするときまでは、わたしの右に座していなさい」と言われたことがあるか。御使たちはすべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたものではないか。こういうわけだから、わたしたちは聞かされていることを、いつそう強く心に留めねばならない。そうでないと、おし流されてしまう。というのは、御使たちをとおして語られた御言が効力を持ち、あらゆる罪過と不従順とに対して正当な報いが加えられたとすれば、わたしたちは、こんなに尊い救をなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか。この救は、初

め主によって語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしされ、さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたのである。

【 アリルイヤ 主日第1調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、
ア リル イ ヤ。

誦經) ^{ねが}願わくは^わ我が^{ため}爲に^{あだ}仇を^{かえ}復し、^{われ}我に^{しょみん}諸民を^{したが}従わ^{かみ}しむる^{さんしょう}神は讚頌せられん、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、
ア リル イ ヤ。

誦經) ^{おおい}大なる^{すくい}救を^{おう}王に^{ほどこ}施し、^{あわれみ}憐を^{なんぢ}爾の^{あぶら}膏^{もの}つけられし^{およ}者^{そのすえ}ダヴィド^{よよ}及び其裔に^{よよ}世に

^た垂る^{もの}者よ、^{われなんぢ}我爾^なの名に^{うた}歌わん、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、
ア リル イ ヤ。

司祭) (黙誦: ^{ひと}人を^{あい}愛する^{しゅさい}主^わ宰よ、^{こころ}我が^{かみ}心に^し神を^{ちえ}知る^{いさぎよ}智慧の^{ひかり}浄^{かがや}き^わ光を^{しねん}輝かし、^わ我が^{しねん}思念

^めの^{ひら}目を^{なんぢ}啓きて、^{なんぢ}爾が^{ふくいん}福音の^{おしえ}教を^{さと}悟らしめ^{たま}給え、^わ我が^{うち}衷に^{なんぢ}爾の^{ふく}福たる^{いましめ}誠を

^{おそ}畏る^{おそれ}る^い畏をも^{われら}入れて、^{ことごと}我等が^{にくたい}悉^{よく}くの^ふ肉體の^{およ}慾を^{なんぢ}踏み、^{よるこ}凡そ^{ところ}爾の^{よるこ}喜ぶ^{ところ}所

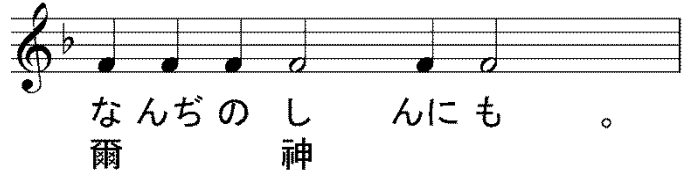
^{おも}を^か思い^{おこな}且つ^{ぞくしん}行^{せいかつ}いて、^す屬^{いた}神の^{たま}生活を^{けだし}過ぐる^{かみ}を^{かみ}致させ^{かみ}給え、^{かみ}蓋^{かみ}ハリストス^{かみ}神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
爾は我が 靈と體との光 照なり、我等 爾と爾の無原の父と至聖至善にし

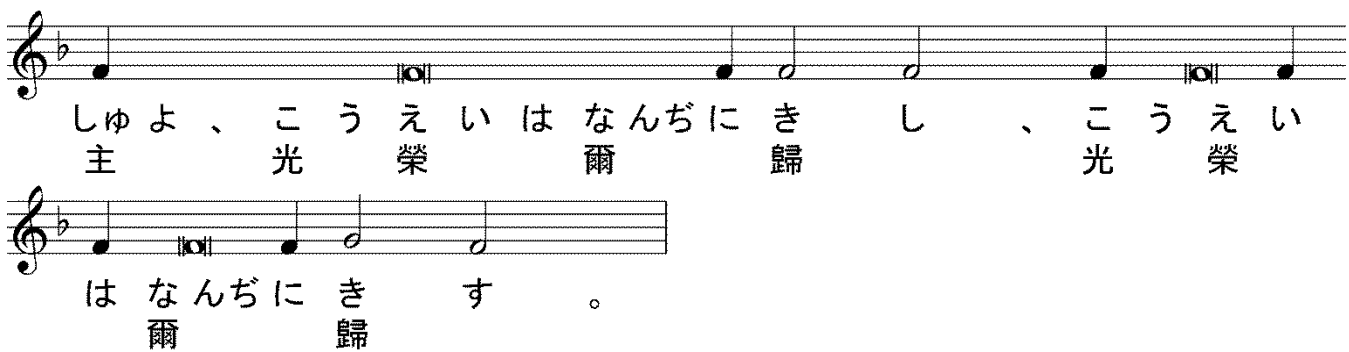
いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を 施す 爾の神とに光 榮を 獻ず、今も何時も 世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書7端 2章1~12節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) マルコ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイスカペルナウムに入れり、彼が家に在ること聞えたらば、

ただち おおひとあつまもんかたわらみいところいたかれこれおしえの
直に多くの人集りて、門の傍にも身を容る處なきに至れり、彼は之に教を宣

べたり。癱瘋の者を攜えて、彼に來れるあり、四人之を昇けり、人の衆きに因りて、

かれちかえそのあところやねひらこれあなちゅうぶうものふとこ
彼に近づくを得ずして、其在る處の屋蓋を啓き、之に穴して、癱瘋の者の臥したる牀

をつおろかれらしんみちゅうぶうものいこなんぢつみなんぢゆる
を縫り下せり。イイスス彼等の信を見て、癱瘋の者に謂う、子よ、爾の罪は爾に赦さ

る。此に或學士等の坐せるあり、心の中に議して曰く、斯の人何ぞ斯く褻瀆を言う、獨

かみほかたれつみゆるえそのしんもつただちかれらかおのれうち
神より外に、誰か罪を赦すを得ん。イイスス其神を以て、直に彼等が斯く己の衷に

ぎしかれらいなんぢらなんこころうちかぎちゅうぶうものなんぢ
議するを知りて、彼等に謂えり、爾等何ぞ心の中に斯く議する、癱瘋の者に、爾の

つみゆるいあるいおなんぢとことゆいいつれやすしかなんぢ
罪赦さると言い、或は起きて、爾の牀を取りて行けと言うは、孰か易き。然れども爾

らひとこちあつみゆるけんしためちゅうぶうものむかいわ
等が人の子の地に在りて罪を赦す權あることを知らん爲、(癱瘋の者に向いて曰く、)

なんぢいおなんぢとことなんぢいえゆかれただちおとことしゅう
爾に謂う、起きて、爾の牀を取りて、爾の家に往け。彼直に起き、牀を取りて、衆

まえおいいしゅうおどろかみさんえいわれらいまかつかごとみ
の前に於て出でたり、衆駭きて、神を讚榮し、我等未だ嘗て斯くの如きことを見ざ

りきと云^いうを致^{いた}せり。

(比較用 口語訳) イエスがまたカペナウムにお帰りになったとき、家におられるといううわさが立ったので、多くの人々が集まってきて、もはや戸口のあたりまでも、すきまが無いほどになった。そして、イエスは御言を彼らに語っておられた。すると、人々がひとりの中風の者を四人の人に運ばせて、イエスのところに連れてきた。ところが、群衆のために近寄ることができないので、イエスのおられるあたりの屋根をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせたまま、床をつりおろした。イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。ところが、そこに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」。イエスは、彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか。中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに言い、中風の者にむかって、「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③ へ